



治罪法草案

第一篇

5302



715  
6362

治罪法草案



第一篇

刑法

昭和九年五月十四日  
鶴田乙丑氏

治罪法目次

總則

第一篇 司法警察規則

第一章 司法警察

第二章 犯罪告發及告訴

第一款 犯罪告發

第二款 犯罪告訴

第三章 輕罪裁判所檢察及檢察補權

限及職務

第一款 輕罪裁判所檢察及檢察補

推限

第二款 輕罪裁判所檢察及檢察補

職務

第一節 現行犯

第二節 非現行犯

第四章 輕罪裁判所檢察補佐官吏權

限及職務

第一款 輕罪裁判所檢察補佐官吏

權限

第二款 輕罪裁判所檢察補佐官吏

職務

第五章 糾問刑事權限及職務

第一款 糾問刑事權限

第二款 糾問刑事職務

第一款 現行犯

第二款 非現行犯

第三節 證人喚問

第四節 令狀

第五節 假釋

第六節 豫審落着

治罪法

下総則

第一條

法律ニ於テ定メタル重罪輕罪違警罪

ノ刑ハ管轄裁判官ノ宣告アルニ非サレハ之ヲ執行不可カラス

第二條

刑事ノ訴ハ刑法裁判所ニ之ヲ為ス可

シ

犯罪ヨリ生スル民事ノ訴ハ刑事ノ訴ト共ニ

刑法裁判所ニ之ヲ為ス可ト得

又別ニ民法裁判所ニ之ヲ為ス可ト得但シ此

場合ニ於テハ民事ノ訴ノ前又ハ其後ニ為シ

タ刑事ノ訴ニ裁判確定セサル間ハ民事

ノ裁判ヲ停止ス可シ

第三條 刑事ノ訴ハ特ニ其任ヲ受ケタル司法警察

官ニ非サレハ之ヲ為ス可カラズ

民事ノ訴ハ何人ニ限ラズ其損害ヲ受ケタル

者直ニ之ヲ為ス可ヲ得

第四條 刑事ノ訴ハ犯人ノ死去ニ依テ消滅ス

民事ノ訴ハ犯人死スト雖モ其相續人又ハ其

責ニ任スヘキ者ニ對シ之ヲ為ス可ヲ得

刑事並ニ民事ノ訴ハ第一章ニ記載シタル者

滿免除ニ依テ消滅ス

第五條 民事ノ訴ノ抛弃ニ依リ刑事ノ訴ヲ停

止ス可カラズ但シ其被害者ノ親告ヲ必要ト

ス可キ犯罪ハ此限ニアラス

第六條 刑事ノ裁判ハ公行ス但シ豫審ハ此例

ニアラス

第一篇 司法警察規則

第一章 司法警察

第七條 司法警察トハ重罪輕罪違警罪ヲ搜索

シテ其証ヲ取リ犯人ヲ管轄裁判所ニ付スル

ヲ云フ

第八條 司法警察ハ後ノ數條ニ記載シタル規

則ニ循ヒ控訴院検事長ノ監督ヲ受ケ輕罪裁

判所検事検事補及ヒ糾問刑事之ヲ行フ

司法警察ハ輕罪裁判所検事ノ補任トシテ左

ノ官吏モ亦之ヲ行フ

一 警部及警部補

二 戸長及副戸長

三 連警判事

四 備警兵士官

五 税關官吏及田野森林官吏

第九條 警視廳長官及右府縣ノ長官ハ東京府

時宜ニ依リ自ラ犯罪ヲ搜索シテ其証ヲ取リ

輕罪裁判所檢事ニ送付シ又ハ司法警察官ニ

此等ノ處分ヲ求ムルヲ得

第二章 犯罪告發及告訴

第一款 犯罪告發

第十條 官夫其職務ヲ行フニ當リ犯罪アルト

ク知リタル時ハ犯罪ノ地又ハ犯人所在ノ地

ヲ管轄スル輕罪裁判所檢事若クハ其他ハ司

法警察官ニ即時ニ報告シ文書証憑ヲ得ル時

ハ并セテ之ヲ送付ス可シ

第十一條 何人ニ限ラス輕罪又ハ重罪ヲ目撃

シタル時ハ犯罪ノ地又ハ犯人所在ノ地ヲ管

轄スル輕罪裁判所檢事若クハ其他ノ司法警

察官ニ即時ニ報告ス可シ

第十二條 官吏又ハ何人ニ限ラス輕罪又ハ重

罪ヲ目撃シタル場合ニ於テ司法警察官其場

ニ在ラサル時ハ被告人ヲ取押シ即時ニ其地

ヲ管轄スル輕罪裁判所檢事若クハ其他ノ司

法警察官ノ面前ニ引致スルヲ得

第十三條 告發ヲ為スニハ別ニ法式アルヲ無

告發人又ハ其代人書面ヲ以テ告發スル時ハ  
之ニ署名捺印ス可シ若シ口述ヲ以テ告發ス  
ル時ハ司法警察官之ヲ録取シ告發人又ハ其  
代人ヲシテ署名捺印セシム若シ署名捺印ス  
ルヲ肯セス又ハ能ハサル時ハ其旨ヲ調書  
ニ記載ス可シ

第十四條 犯罪告訴

第十四條 何人ニ限ラス重罪輕罪違警罪ノ為  
メ損害ヲ受ケタル者ハ犯罪ノ地又ハ犯人所  
在ノ地ヲ管轄スル輕罪裁判所振事若クハ其  
他ノ司法警察官ニ申立テ民事ノ原告人ト為  
ルヲ得

第十五條 前條ノ場合ニ於テハ損害ヲ受ケタ

ル者其告訴狀ニ民事ノ原告人トナルヲ又ハ  
要償ノ金額ヲ記載ス可シ若シ此等ノ記載ナ  
キ時ハ通常告發トシ視ス可シ

第十六條 告訴ハ告訴人又ハ其代人若クハ當  
該官其求メニ依リ之ヲ記シ告訴人又ハ其代  
人若クハ當該官各自毎葉ニ契印シ紙尾ニ署  
名捺印ス可シ

第十七條 民事ノ原告人タル者其裁判所々在  
ノ地ニ住セサル時ハ其地ニ假リノ住所ヲ定  
メ其旨ヲ告訴狀ニ記載ス可シ若シ此規則ニ  
背テ時ハ法律上ニ於テ當然送達ヲ得ヘキ書  
類ヲ受取ラズト申立ル小雖モ其効ナク可  
シ



第十八条 告訴人の裁判宣告に至る迄何時ニ  
テモ輕罪裁判所換事若クハ其他ノ司法警察  
官又ハ直ニ其裁判所ニ申立テ民事ノ原告人  
ト为ルヲ得

告訴人既ニ民事ノ原告人タル後廿四時内ニ  
於テハ民事原告人タルヲ止ムルヲ得此場  
合ニ於テハ被告人ニ其旨ヲ通知シタルヨリ  
後ノ刑事費用ヲ擔当スルニ及ハス但シ裁判  
宣告ノ後ハ之ヲ止ムルヲ得ヘカラス

第三章 輕罪裁判所換事及ヒ換事補権限  
及ヒ職務

第一款 輕罪裁判所換事及ヒ換事補権限  
第十九条 輕罪裁判所換事ハ重罪輕罪連發罪

ヲ搜索シテ犯人ヲ相當ノ裁判所ニ付ス可シ

第二十條 犯罪ノ地又ハ犯人所在ノ地ヲ管轄  
スル輕罪裁判所換事ハ前条ノ職務ヲ行フ可  
シ

第二十一條 輕罪裁判所換事ハ其職務ヲ行フニ  
ツキ直ニ兵カヲ求ムルヲ得

第二十二條 輕罪裁判所換事差支了ル時ハ換事  
補代理ス可シ若シ換事補アラサル時ハ裁判  
長官ヨリ特ニ委任ヲ受ケタル判事又ハ判事  
補代理ス可シ

第二十三條 輕罪裁判所換事ハ時宜ニ依リ其職  
權内ノ一部ヲ補佐官吏ニ委任スルヲ得

第二十四條 輕罪裁判所換事ハ刑事犯罪アル

ヲ知リタル時ハ即時ニ控訴院検事長ニ申報  
シテ其指揮ヲ待ツ可シ但シ急遽ノ際ニ於テ  
ハ臨機處分スルヲ得

第廿五條 輕罪裁判所検事ハ重罪輕罪違警罪  
ノ事件ヲ表ニ製シ八日毎ニ控訴院検事長ニ  
申報ス可シ

第廿六條 輕罪裁判所検事ハ第五章ノ規則ニ  
循ヒ糾問判事ヨリ送付スル處ノ言渡書ヲ送  
達セシメ及之ヲ執行セシム

第ニ款 輕罪裁判所検事及ヒ検事補職  
務

第一節 現行犯

第廿七條 現行犯又ハ即今行ヒ終リタル罪

ヲ現行犯トス  
又兇器贓物文書其他犯罪ノ証憑タル可キ物

件ヲ携帶シ犯人ト思察ス可キ時ハ既ニ時日  
ヲ過キタリト雖モ亦現行犯ニ准ス

第廿八條 輕罪裁判所検事ハ告訴告發又ハ其  
他ノ方法ニ依リ現行ノ輕罪又ハ重罪アルハ  
ヲ知リタル時ハ即時ニ犯罪ノ情

狀及ヒ其場ノ模様ヲ証スルニ必要ナル調書  
ヲ作シ可シ

第廿九條 輕罪裁判所検事ハ前條ノ場合ニ於  
テ其場ニ居合セタル人及ヒ行害者被害者ノ  
親族隣佑僕婢其他事犯前後ノ事狀ヲ知リタ  
ル人ノ供述ヲ聽ク可シ

其供述書ニハ各自署名捺印セシム若シ署名捺印スルコトヲ肯ビス又ハ能ハサル時ハ其旨ヲ調書ニ記載ス可シ

第三十條 輕罪裁判所檢事ハ其調書ヲ記シ終ル迄何人ニ限ラス犯罪ノ場所ヲ立去ルコトヲ禁スルコトヲ得

若シ此禁制ニ背ク者アル時ハ直ニ取押ハ之ヲ勾留ス可シ但シ此禁制ニ背キタルニ付テ

ノ刑ハ其犯人ヲ糾問刑事ノ面前ニ呼出シ糾問刑事其供述ヲ聞キ輕罪裁判所檢事ノ求刑ニ依リ之ヲ言渡ス可シ若シ犯人出席セサル

時ハ出席セサル儘ニテ之ヲ言渡ス可シ其刑ハ罰金貳拾圓ニ過クルコト無カル可シ此言渡ラ

為スニツキテハ特ニ法式ヲ用フルコト無ク期限

ニ拘ハルコト無ク且ツ其言渡ニツキ故障ヲ述ルコト許サス

第三十一條 輕罪裁判所檢事ハ犯罪ノ用ニ供シ又ハ供セントシタル物件及ヒ犯罪ヨリ生

シタル物件并ニ事實ヲ分明ナラシムルニ必要ナリト認メタル各物類及ヒ物件ヲ押収シテ

調書ニ記載ス可シ

第三十二條 輕罪裁判所檢事ハ被告人ノ所持スル各物類及ヒ物件ニヨリ犯罪又ハ無罪ノ証

ヲ得ヘシト思料シタル時ハ即持一被告人ノ住所ニ臨檢シテ其各物類及ヒ物件ヲ押収ス可シ

若シ其各物類及ヒ物件ヲ住所外ニ藏匿シタル

可シト思料シタル時ハ即時ニ其場所ニ臨検  
シテ之ヲ押収ス可シ

若シ又管轄地外ニ藏匿シタル可シト思料シ  
タル時ハ其地ノ輕罪裁判所検事ニ其処カラ  
求ム可シ

第三十三條 前条ニ記載シタル處カハ被告人

ヲ取押ヘタル時ハ其本人若クハ其代人ノ面  
前ニ於テ之ヲ行フ可シ若シ被告人立會ラ  
ス下ラ肯セス又ハ能ハサル時ハ其旨ヲ調  
査ニ記載ス可シ

第三十四條 輕罪裁判所検事ハ第三十一條第

三十二條ノ場合ニ於テ押収シタル紙テノ各  
類及ビ物件ヲ被告人ニ示シテ其辨解ヲ為サ

シノ之ヲ調書ニ記載シ被告人ニ署名捺印セ

ルハ若シ署名捺印スル下ラ肯セス又ハ能ハ

サル時ハ其旨ヲ調書ニ記載ス可シ

其各類及ビ物件ハ之ヲ保存ス可キ必要ナル

処置ヲ為シ之ニ封印ス可シ

第三十五條 輕罪裁判所検事ハ被告人ニ犯罪

ノ証憑アリテ被告人猶ホ犯罪ニ在ル時ハ即  
時ニ取押ヘシメ若シ犯罪ニ在ラサル時ハ可  
列状ヲ發ス可シ  
被告人ヲ取押ヘ又ハ勾引シタル時ハ即時ニ  
糾問シテ其供述ヲ調書ニ記載シ被告人ヲシ  
テ每葉ニ契印シ紙尾ニ署名捺印セシム若シ  
署名捺印スル下ラ肯セス又ハ能ハサル時ハ

其旨ヲ調書ニ記載ス可シ  
 前項ノ場合ニ於テ被告人ニ十分ナル犯罪ノ  
 証憑アル時ハ糾問中被告人ヲ勾留シ又ハ其  
 被告人ノ願ニヨリ假釋ノ言渡ヲ為スコトヲ得  
 被告人ニ對シ勾引状勾留状ヲ發シ又ハ假釋ノ  
 言渡ヲ為スニツキテハ第五章第ニ款第四節及  
 七第節ニ記載シタル規則ニ循フ可シ  
 第三十六條 輕罪裁判所檢事ハ前數條ノ場合  
 ニ於テ調書ヲ記スル時ハ其ノ地ノ警部又ハ  
 戶長又ハ何人ニ限ラズ其地ニ住スル者二人  
 已上ノ立會ヲ必要トス若シ即時二人ノ立會  
 ヲ得ザルキハ一人若シ又一人ノ立會ヲ得サ  
 ル時ハ立會人十クシテ調書ヲ記スルコトヲ得

其調書ニハ輕罪裁判所檢事及ヒ立會人各自  
 毎葉ニ契印シ紙尾ニ署名捺印ス可シ若シ立  
 會人署名捺印スルコトヲ肯マス又ハ能ハサル  
 時ハ其旨ヲ調書ニ記載ス可シ  
 第三十七條 輕罪裁判所檢事ハ犯罪ノ種類及  
 ヒ模様ニツキ鑑定ヲ必要トスル時ハ技術又  
 ハ職業ノ者一人又ハ二人ヲ選ビテ鑑定セシム  
 可シ  
 第三十八條 非命死又ハ變死原因ヲ知レサル  
疑ハレヤモナルアル時  
 ハ輕罪裁判所檢事ハ醫師一人又ハ二人ヲ選  
 テ立會ヲ為サシメ其死ノ原因及ヒ死体ノ摸  
 樣ニツキ供速書ヲ取ラシム可シ  
 第三十九條 前二条ノ場合ニ於テ輕罪裁判所

換事ハ医師又ハ鑑定人ヲシテ正実ナル供述  
ヲ為ス可キ誓昏ヲ呈セシメ此等ノ事ヲ調昏  
ニ記載シ且ツ其供述昏ニハ各自毎葉ニ契印  
シ紙尾ニ署名捺印セシム若シ署名捺印スル  
トフ肯セス又ハ能ハサル時ハ其旨ヲ調昏ニ  
記載ス可シ

第四十條 輕罪裁判所換事ハ前數條ニ記載シ  
タル處分既ニ終リ被告人ニ重罪ノ証憑アリ  
ト認メタル時ハ該犯ニ管スル昏類ヲ控訴院  
換事長ニ差出ス可シ  
被告人ニ輕罪ノ証憑アリト認メタル時ハ呼  
出ノ期限ニ拘ハルルヲ無ク被告人ヲ其裁判所  
ニ呼出シ直ニ公判ヲ求ム可シ

若シ其裁判所閉廷タル時ハ其被告人ヲ次  
第ニ裁判席ニ呼出シ公判ヲ求ム可シ但シ此場  
合ニ於テハ被告人ヲ勾留スル間ヲ得  
第四十一條 前條ノ場合ニ於テ事情繁雜ナル  
者ハ文卷物件ヲ纏メ糾問判事ニ付シテ豫審  
ヲ求ム可シ

第二節 非現行犯  
第四十二條 輕罪裁判所換事ハ現行犯ノ場合  
ヲ除ク外告訴又ハ其他ノ方法ニ依リ其  
管轄地内ニ犯罪アルヲ知リ又ハ犯人其  
管轄地内ニ在リテ知ル時ハ糾問判事  
ニ豫審ヲ求ム且ツ時宜ニ依リ臨檢ノ処分ヲ  
求ム可シ

第四十三條 現行犯ノ場合ニ非ラスト至モ家  
屋内ニ於テ重罪又ハ輕罪ヲ行フ外ニ依リ  
其戶主臨檢ヲ求メタル時ハ輕罪裁判所檢事  
ハ第三章第一款第一節ニ記載シタル規則ニ  
循テ処分スルヲ得  
第四十四條 輕罪裁判所檢事ハ糾問判事ノ豫審  
中其書類ヲ檢閲セシト求ムルヲ得但シ廿  
四時内ニ之ヲ還付ス可シ  
第四十五條 輕罪裁判所檢事補佐官吏權限及  
管轄地内ニ於テ司法警察ノ職務ヲ行フ可シ

第四十六條 警部及ヒ戶長ハ平常連警罪裁判  
所ニ於テ檢察官ノ職務ヲ行フ可シ  
第四十七條 戶長司法警察及ヒ連警罪裁判所  
ニ於テ檢察官ノ職務ヲ行フハ警部及ヒ警部  
補不在ノ時ニ限ル可シ  
第四十八條 警部差支アル時ハ警部補代理ス  
戶長差支アル時ハ副戶長代理ス可シ  
第四十九條 輕罪裁判所檢事補佐官吏ハ共職  
務ヲ行フニツキ直ニ兵力ヲ求ムルヲ得  
第五十條 輕罪裁判所檢事補佐官吏ハ現行  
重罪又ハ輕罪ノ場合及ヒ第四十三條ノ場合

二於テハ第ニ章第ニ款第ニ節ニ記載シタル  
規則ニ依リ直ニ之ヲ処分スルヲ得  
前項ノ場合ニ於テハ其調昏及ヒ押収シタル  
昏類物件ヲ即時ニ輕罪裁判所檢事ニ差出ス  
可シ

第五十一條 輕罪裁判所檢事補佐官吏ハ現行  
犯ノ場合ヲ除クノ外告誡告発又ハ其他ノ方  
法ニ依リ其管轄地内ニ重罪又ハ輕罪アルヲ  
知リ又ハ犯人其管轄地内ニ在ルヲ知リ  
タル時ハ其昏類ヲ纏メ輕罪裁判所檢事ニ差  
出シ連警罪ハ連警罪裁判所詰ノ警部又ハ戶  
長ニ送付ス可シ  
其調昏ニハ連警罪ノ種類摸樣犯所日時証狀

及ヒ被告人共ニ証人ノ姓名年齢身分職業住  
所ヲ記載ス可シ

第五十二條 連警罪裁判所詰、警部又ハ戶長ハ  
連警罪ノ事件ヲ表ニ製シ三日毎ニ輕罪裁判  
所檢事ニ申報ス可シ

第五章 糾問判事権限及ヒ職務

第一款 糾問判事権限

第五十三條 糾問判事ハ現行犯ノ場合ヲ除ク  
ノ外輕罪裁判所檢事ノ請求アルニ非サレハ  
豫審ヲ行フ可カラス

第五十四條 糾問判事ハ犯罪ノ事實ヲ分明ナ  
ラシムル為メ輕罪裁判所檢事ノ請求ニ依リ  
又ハ自己ノ職務ヲ以テ被告人又ハ其他ノ者



八住所ニ臨檢不可  
 第五十五條 糾問判事其職務ニ行テ其裁判  
 所ノ管轄地内ニ限可シ  
 第五十六條 糾問判事ハ輕罪裁判所檢事ヲ除  
 ク外其他ノ司法警察官ニ委任シテ其職推  
 内ノ一部ヲ行ハル得  
 第五十七條 糾問判事ハ通常裁判官ノ職務ヲ  
 兼行スル得但自豫審ヲ行フタル事  
 件ニツキテ此規則ヲ用ユ可カラス  
 第五十八條 糾問判事差支アル時ハ裁判長官  
 ヲリ特ニ委任ヲ受ケタル判事又ハ判事補代  
 理人可シ  
 第六十條 糾問判事職務

第五十九條 糾問判事ハ現行ハ重罪又ハ輕罪  
 ノ場合及テ第四十三條ノ場合ニ於テハ第三  
 章第二款第一節ニ記載シタル規則ニ循ヒ直  
 ニ之ヲ処分ス可シ  
 前項ノ場合ニ於テハ其調査及ヒ押収シタル  
 各類物件ヲ即時ニ輕罪裁判所檢事ニ送付ス  
 可シ  
 第六十條 糾問判事ハ第四十一條ノ場合ニ於  
 テ豫審ヲ行フ時ハ總テ非現行犯ノ規則ニ循  
 フ可シ  
 第六十一條 糾問判事豫審ヲ行フニツキテハ  
 第二節 非現行犯

第廿八條第二十九條第三十條第三十一條第  
三十二條第三十三條第三十四條三記載シタ  
ル規則ヲ通シ用ユ可シ但シ臨檢スル時ハ輕  
罪裁判所檢事ハ立會ヲ求ム可シ  
第六十二條糾問判事豫審ヲ行ハルニ付テハ  
書記官ノ立會ヲ必要トス但シ立會ナクシテ  
行フタラシ事件其効ナカレ可シ  
現行犯以場合於テモ亦前項ノ規則ヲ通シ  
用ユ可シ但シ之カ為メ其知合ヲ遲延ス可カ  
ラズ  
第三節証人喚問  
第六十三條 糾問判事ハ輕罪裁判所檢事民事  
ノ原告人及モ被告人ヲ申立ニ依リ又ハ其他

ノ方法ニ依リ犯罪ノ情狀ヲ知リタル者ヲ証  
人トシテ呼出ス可シ  
第六十四條 呼出狀ハ輕罪裁判所檢事ノ命ニ  
依リ使吏又ハ巡查之ヲ本人又ハ其住所ニ送  
達シ其副本ヲ交付ス可シ  
若シ其住所ニ本人及ビ家族僕婢共ニ在ラサ  
ル時ハ其地ノ戸長又ハ副戸長ニ其副本ヲ交  
付ス可シ但シ此場合ニ於テハ呼出狀ノ正本  
ニ戸長又ハ副戸長ノ檢印ヲ求メ之ヲ令狀ヲ  
執行セシメタル輕罪裁判所檢事ニ差出ス可  
シ  
第六十五條 糾問判事証人ヲ呼出スニハ其証  
人呼出狀ノ送達ヲ受ケタル時ヨリ裁判所ニ

出席ス此迄之暮限廿四時間ヨリ少ナクハ可  
カラス若シ証人遠地ニ住スル時ハ八里毎ニ  
<sup>更</sup>一日ノ猶豫ヲ加フ可シ此規則ニ背ク時ハ其

呼出<sup>状</sup>ノ知テカル可シ

第六十六條 紀問判事ハ時宜ニ依リ前ニ條ノ

規則ニ拘ハラズ証人ヲ呼出ス下ヲ得此場合

ニ於テハ其証人出席セズトモ其罪ヲ問フ

可カラズ

第六十七條 紀問判事ハ書記官ノ立會ニ依リ

証人ヲシテ被告人ニ接見セシムルヲ無ク各

人隔別ニ訊問ス可シ

第六十八條 紀問判事ハ訊問前証人ヲシテ其

呼出ヲ受ケタル時出状ヲ差出サシメ其旨ヲ

調書ニ記載ス可シ

第六十九條 紀問判事ハ各証人ヲシテ訊問ニ

志シ正実ナル供述ヲ為ス可キ誓書ヲ呈セシ

メ其姓名年齢身分職業住所并ニ原告人被告

人ノ等親僕婢タルヤ否ヲ問ニ此等ノ訊問及

ヒ答辭ヲ調書ニ記載ス可シ

第七十條 証人ノ供述書ハ之ヲ本人ニ讀ミ

聞カセ其甘結ヲ取り糾問判事書記官及ヒ証

人各自毎葉ニ契印シ紙尾ニ署名捺印ス可シ

若シ証人署名捺印スルヲ肯セズ又ハ能ハ

サル時ハ其旨ヲ調書ニ記載ス可シ

第七十一條 証人ノ供述書ニハ文中字句ヲ擁

記ス可カラズ若シ改竄追書スルヲアル時ハ

紀問判事書記官及口証人各自認印不可  
第百廿七條 其改竄追書ハ効ナクハ可  
第百廿八條 前四條ニ記載ニタル規則ニ背ク  
時ハ書記官ハ拾円ハ罰金ヲ言渡サレ紀問判  
事ハ損害賠償不可ヤハ訴テ受クル可  
第百廿九條 紀問判事ハ事實参考ク為メ行害  
者被害者ノ等親僕婢及七十五歳以下ノ男女  
其他正當ハ証人タルヲ得サレ者ハ供述ヲ聽  
クイラ得但シ此等ノ者供述ヲ為スニハ誓書  
ヲ用ヒス  
第百三十條 糾問判事ハ証人其裁判所ニ在ノ  
地ニ住セサル時ハ証人住所ノ地ヲ管轄スル

連警判事ニ其処分ヲ委任スルヲ得  
若シ証人管轄地外ニ住スル時ハ其地ノ紀問  
判事ニ其処分ヲ求ム可シ  
其委任ヲ受ケタル連警判事及七其求メテ受  
ケタル紀問判事ハ証人ヲ訊問シタル上其昏  
類ヲ封シテ犯罪ヲ管轄スル紀問判事ニ送付  
ス可シ  
第百三十五條 紀問判事ハ証人呼出ヲ受ケテ出  
席セサル時ハ輕罪裁判所檢事ノ請求ニ依リ  
貳拾円ニ過キサル罰金ヲ言渡し且ツ証ヲ述  
ヘシムルヲ為メ勿列ス可キ旨ヲ言渡スルヲ得  
但シ其言渡ヲ為スニ府テハ別ニ法式ヲ用フ  
ルヲナク及ヒ期限ニ拘ハルヲナク且ツ其言

渡ニ故障ヲ述ケルコトヲ許サス  
第七十六條 証人問判事ハ初度呼出テ受ケテ  
出席セザルニ依リ罰金ヲ言渡サレタル証人  
再度呼出テ於テ出席シ初度出席セザリシ  
正當ノ理由ヲ辨解シタル時ハ輕罪裁判所檢  
査事ノ意見ヲ聞キ其罰金ヲ言渡テ取消ス可シ  
第七十七條 証人問判事ハ証人再度ノ呼出ヲ受  
ケテ出席セザル時ハ勾引状ヲ發ス可シ  
第七十八條 証人問判事ハ証人勾引状ニ依リ出  
席シタル時ト雖モ以前出席セザリシ正當ノ  
理由ヲ辨解シタル時ハ輕罪裁判所檢査事ノ意  
見ヲ聞キ其罰金ヲ言渡テ取消ス可シ  
此條及七前条ノ場合ニ於テ証人正當ノ辨解

ナキ時ハ再度ノ呼出状ニ勾引状ノ費用ヲ  
言渡ス可シ但シ此言渡ニツキ故障ヲ述ルコ  
トヲ許サス  
第七十九條 証人問判事ハ証人犯罪ノ事矣ヲ知  
ルト雖モ其証ヲ供述スルコトヲ肯セス又ハ誓  
書ヲ出スコトヲ肯セサル時ハ輕罪裁判所檢査事  
ノ請求ニ依リ第七十五條ニ記載シタル規則  
ニ循テ貳拾円ニ過キサル罰金ヲ言渡ス可シ  
第八十條 証人問判事ハ証人債ヲ得ニト求ム  
ル時ハ其金額ヲ定ム可シ  
第八十一條 証人問判事ハ証人疾病ニ依リ医師  
ノ証書ヲ以テ出席スルコト能ハサル旨ノ届出  
テタル時ハ証人ノ住所ニ臨ミ其供述ヲ聽ク

可シ

第八十二條 糾問判事ハ前条ノ場合ニ於テ証人ノ住所ニ臨シ其証人呼出ヲ受ケテ出席セザリシ原因ヲキコフヲ覺知シタル時ハ証人及テ証書ヲ依リタル医師ニ對シ勾留状ヲ發ス可シ此場合ニ於テハ糾問判事ハ第七十五條ニ記載シタル規則ニ循テ証人并ニ証書ヲ依リタル医師ニ對シ貳拾圓ニ過キサル罰金ヲ言渡ス可シ但シ刑法第七十條ト相觸ル、ト勿カル可シ

第四節 令状

第八十三條 糾問判事ハ被告人ヲ喚散シ又ハ

勾引シ又ハ勾留スル時ハ必ラス令状ヲ用ユ可シ令状ハ日本帝國管内ニ通シ之ヲ執行ス可シ

第八十四條 喚散状勾引状ニハ被告人ノ姓名

年齢身分職業出生ノ地住所及テ其告ケラレタル事件并ニ年号月日等ヲ記載シ糾問判事之ニ署名捺印ス可シ

第八十五條 勾引状ニツキテモ前条ニ記載シタル法式ヲ用ヒ且ツ其告ケラレタル事件ヲ重罪又ハ輕罪ト為ス刑法ノ箇条ヲ記載ス可シ

第八十六條 令状ハ輕罪裁判所檢事ノ命ニ依

リ使吏又ハ巡查又ハ備警兵之ヲ被告人ニ送達シ正本ヲ示シテ認知セシメ其副本ヲ交付ス可シ

第八十七條 糾問判事ハ重罪輕罪ヲ論マス被

告人ニ對シ喚徴状ヲ發ス可シ但シ時宜ニヨ  
リ先ツ勾引状ヲ發スルヲ得  
若シ被告入喚徴状ヲ受ケテ出席セサル時ハ  
勾引状ヲ發ス可シ  
第八十八條 糾問判事ハ被告入喚徴状ニ依リ  
出席シタル時ハ即時ニ之ヲ糾問ス可シ  
被告入勾引状ニ依リ出席シタル時ハ廿四時  
内ニ之ヲ糾問ス可シ但シ糾問ニ至ル迄ハ勾  
引状ノ傍被告入ヲ其裁判所ニ留メ置ク可シ  
第八十九條 糾問判事ハ前条ノ場合ニ於テ糾  
問ノ上被告入ニ犯罪ノ証憑アリト認メタル  
時ハ其被告入ニ對シ勾留状ヲ發ス可シ  
勾留状ハ輕罪裁判所檢事ノ意見ヲ聞キタル

上ニ非テハ之ヲ發ス可ラス  
第九十條 勾留状ヲ受ケタル被告入ハ輕罪  
裁判所ノ勾留所ニ勾留セシム但シ其監吏ハ  
勾留状ヲ見タル上ニ之ヲ簿冊ニ登寫シ令  
狀執行ノ任ヲ受ケタル者ニ被告入ヲ受取リ  
タル証書ヲ交付ス可シ  
第九十一條 若シ勾引状ヲ發シタル時被告  
入ノ在ラサルニ於テハ令狀執行ノ任ヲ受ケ  
タル者被告入ノ鄰佑ノ者二人已上ノ立會ヲ  
求メ其室内ヲ搜索シテ搜索証書ヲ作り其証  
書ニハ令狀執行ノ任ヲ受ケタル者並ニ立會  
人署名捺印ス可シ若シ立會人署名捺印スル  
ヲ肯セズ又ハ能ハサル時ハ其旨ヲ証書ニ

附記ス可シ  
勾引状并ニ搜索証書ニ其其他又司法警察官  
ノ檢印ヲ求メ令状ヲ執行セシメタル輕罪裁  
判所檢事ニ之ヲ差出入可シ  
第九十二條 被告人勾引状ニ應セズ又ニ應シ  
タル上逃亡セシトスル時ハ令状執行ノ任ヲ  
受ケタル者直ニ之ヲ拿捕ス可シ  
若シ拿捕ノ爲メ已ムヲ得サル場合ニ於テハ  
最近ノ巡查又ハ備警兵ニ勾引状ヲ示シテ助  
力ヲ求ムルヲ得但シ其求メテ受ケタル巡  
査又ハ備警兵ハ即時ニ其求メニ應ス可シ  
第九十三條 被告人逃亡シテ其所存ヲ知ラザ  
ル時ハ輕罪裁判所檢事ハ其勾引状ノ寫ニ人

相存ヲ付シ官轄又全スル輕罪裁判所檢事  
長ニ官轄控訴院檢事長ニ即時ニ申報ス可シ  
其檢事長ハ其勾引状ノ寫ニ人相存ヲ付シ各  
控訴院檢事長ニ送達ス可シ各控訴院檢事長  
ハ其勾引状ノ寫ニ人相書ヲ付シ其官轄ノ輕  
罪裁判所檢事ニ配付ス可シ  
第九十四條 勾引状ヲ捺シタル糾問判事ノ官  
轄地外ニ於テ其被告人ヲ発見シタル時ハ其  
地ヲ官轄スル輕罪裁判所檢事ノ面前ニ勾引  
スルヲ得  
此ノ場合ニ於テハ其輕罪裁判所檢事ハ勾留  
状ヲ捺シテ其被告人ヲ假ニ勾留セシメ犯罪  
ノ地ヲ官轄スル輕罪裁判所檢事ニ即時ニ其



旨ヲ報告ス可シ  
第九十五條 前條 報告ヲ受ケタル輕罪裁判  
所換事ハ令狀ヲ發シタル糾問判事ニ即時ニ  
其旨ヲ報告ス可シ  
其報告ヲ受ケタル糾問判事ハ勾留狀ヲ發シ  
被告人ヲ自己ノ所在ノ地ニ勾留所ニ移ス可  
キ旨ヲ被告人所在ノ地ノ糾問判事ニ報告シ  
又其糾問判事ニ總テノ處分ヲ求ムルヲ  
得  
第九十六條 若シ昏記官令狀ノ法式ニ背ク時  
二十円以上ノ罰金ヲ言渡サレ糾問判事又ハ  
輕罪裁判所換事其法式ニ背ク時ハ損害ヲ償  
フ可キヲ詔ヲ受ケルヲアル可シ

第五節 假釋

第九十七條 糾問判事ハ犯罪ノ如何ヲ論セス  
被告人ノ願ニ依リ且ツ輕罪裁判所換事ノ意  
見ヲ聞キ其被告人ニ假釋ノ言渡ヲ為ス  
得但シ被告人ハ何時ニテモ呼出ニ從ヒ審問  
ヲ受クル為メ及ヒ裁判執行ノ為メ出頭ス可  
キノ盟約ヲ為スヲ必要トス  
第九十八條 糾問判事假釋ノ言渡ヲ為スニ  
テハ左ノ諸件ヲ保証セシムル為メ其被告人  
又ハ保証人ヲシテ保証金ヲ豫納セシム可シ  
第一 何時ニテモ呼出ニ從ヒ審問ヲ受クル  
為メ及ヒ裁判執行ノ為メ出頭ス可キ事  
第二 左ニ記載シタル諸件ヲ擔當ス可キ事

刑事費用  
民事費用

罰金

償金

其保証金額ハ糾問判事之ヲ定メ假釈ノ言渡  
看ニ記載ス可シ

第九十九條 假釋ヲ求ムル被告人其裁判所

在リ地ニ住セサルニ於テハ其地ニ假リノ住

所ヲ定メ其旨ヲ其裁判所ハ登記局ニ申告ス

可シ

第一百條 假釋ヲ願フ看面ハ被告人使吏ニ依リ

民事原告人又ハ其住所ニ送達ス可シ民事原

告人ハ其看面ヲ受取リタル時ヨリ廿四時内

ニ自己ノ意見ヲ辨明スル看面ヲ差出ス可シ  
得

第一百條 糾問判事ハ被告人假釋ノ願看ヲ民

事原告人ニ送達シタルヨリ三日内ニ其被告

人ヲ假釋ス可キヤ否ヲ言渡ス可シ

第一百二條 被告人假釋ノ言渡ヲ得タル時ハ其

被告人又ハ保証人ヨリ保証金ヲ其裁判所ノ

會計局ニ納ム可シ

輕罪裁判所檢事ハ其保証金ヲ受取リタル會

計局ノ証看ヲ檢視シタル上假釋ノ執行ヲ為

ス可シ

第一百三條 糾問判事ハ被告人ヲ假釋シタルト

雖取調ノ上更ニ重大ナル事實アルヲ覺

知レタル時ハ其被告人ニ對シ更ニ勾留状ヲ  
発スルヲ得但シ此場合ニ於テハ總テ保  
証金ヲ還付ス可シ

然レモ控訴院ノ重罪問擬局ニテ糾問判事ノ  
言渡ヲ更改シテ其被告人ヲ假釋シタルキハ  
重罪問擬局ニテ檢事ノ意見ヲ聞キ假釋ノ言  
渡ヲ取消シタル後ニ非ヤレハ糾問判事ハ其  
被告人ニ對シ更ニ勾留状ヲ發ス可ラス

第一百四條 被告人盟約ニ違ヒ出席セサル時ハ  
第一ノ保証金ヲ沒收ス可シ  
第一百五條 被告人ヲ違警罪裁判所ニ移シ又ハ  
其被告人ニ訴フ可キ事由ナキ旨ヲ言渡シタ  
ル時ハ總テノ保証金ヲ還付ス可シ

被告人ヲ控訴院ノ重罪問擬局又ハ輕罪裁判  
所ニ移シタル時ハ裁判宣告ニ至ル迄總テ  
保証金ハ其依之ヲ會計局ニ預リ置ク可シ  
第一百六條 被告人ハ又左ノ裁判所ニ假釋ヲ得  
ント求ムルヲ得

糾問判事ノ言渡ヨリ重罪裁判所ニ訴ヲ移ス  
ニ至ル迄ハ控訴院ノ重罪問擬局ニ其假釋ヲ  
求ム可シ  
輕罪裁判所ニ訴ヲ移シタル時ハ輕罪裁判所  
ニ其假釋ヲ求ム可シ但シ輕罪裁判所ノ裁判  
宣告ヲ控訴シタル時ハ控訴院ニ其假釋ヲ求  
ム可シ  
裁判宣告ヲ受ケタル者第一條ノ規則ニ循ヒ

大審院ニ上告セシカ爲メ假釋ヲ得ニト求ム  
ル時ハ其裁判宣告ヲ行フタル重罪裁判所又  
ハ輕罪裁判所ニ其假釋ヲ求ム可シ  
第百七條 前条ノ場合ニ於テハ其裁判官會議  
ノ室ニテ換察官ノ意見ヲ聞キ被告人ヲ假釋  
ス可キヤ否ヲ言渡ス可シ  
被告人ヲ假釋スルニツキテハ總テ前数条ニ  
記載シタル規則ニ循ヒ處分ス可シ  
被告人ニ刑ヲ宣告シタル時ハ第九十八條ニ  
記載シタル順序ニ循ヒ第二ノ保証金ヲ没収  
シ裁判費用及ヒ罰金ト償金トニ充テ用ヒ餘  
金アル時ハ之ヲ還付ス可シ但シ被告人ニ無  
罪ナリト宣告シタル時又ハ其罪ヲ赦ス可キ

旨ヲ宣告シタル時ハ總テハ保証金ヲ還付ス  
可シ  
第百八條 換察官ハ自己ノ職務ニ依リ及ヒ民  
事原告人ノ求メニ因リ第百四條ニ循ヒ被告  
人出席セザリレテ証スル各記官ノ証言又  
ハ第百七條ニ記載シタル裁判宣告各ノ抜書  
ヲ保証金ヲ預ル裁判所ノ會計局ニ送付ス可  
シ  
其會計局ニ於テハ換察官ヨリ送付シタル各  
類ニ據リ其保証金ヲ分配ス可シ  
若シ此等ノ事件ニツキ争ハ生スル時ハ其訴  
状ニ拠リ裁判官會議ノ室ニテ裁判宣告ノ執  
行ニ附帯シタル訴訟トシテ之ヲ裁判ス可シ

第百九條 重罪裁判所ニ移シタル被告人ハ假  
釋ヲ得タル時ト雖モ控訴院ノ重罪問擬局ハ  
言渡昏ニ附記シタル勾留ノ言渡ニ依リ之ヲ  
重罪裁判所ノ勾留所ニ勾留ス可シ

第六節 豫審落着

第百十條 糾問判事豫審ヲ為シ終リタル時ハ  
即時ニ其昏類ヲ輕罪裁判所檢事ニ送付シ輕  
罪裁判所檢事ハ其昏類ヲ取調シ三日内ニ請  
求昏ヲ糾問判事ニ送付ス可シ

第百十一條 糾問判事ハ被告人ノ告ケラレタ  
ル所為重罪ニモ輕罪ニモ違警罪ニモアラス  
ト認メタル時又ハ被告人ニ犯罪ノ証憑ナシ  
ト認メタル時ハ其被告人ニ訴フ可キノ事由

ナキ旨ヲ言渡シ既ニ被告人ヲ勾留シタル時  
ハ之ヲ解放ス可シ

第百十二條 糾問判事ハ被告人ニ違警罪アリ  
ト認メタル時ハ違警罪裁判所ニ移シ既ニ被  
告人ヲ勾留シタル時ハ之ヲ解放ス可シ

第百十三條 糾問判事ハ被告人ニ輕罪アリト  
認メタル時ハ輕罪裁判所ニ移シ既ニ被告人  
ヲ勾留シタル時ハ其終勾留所ニ留置ク可シ

第百十四條 糾問判事被告人ヲ違警罪裁判所  
ニ移シタル時又ハ輕罪裁判所ニ移シタル時  
ハ輕罪裁判所檢事ハ總テノ証昏類ニ番号ヲ

附シ四十八時内ニ其証昏類ヲ相当ノ裁判所  
昏記局ニ送付ス可シ

被告人ヲ輕罪裁判所ニ移シタル時ハ輕罪裁判所檢事第百九條ニ記載シタル<sup>規則</sup>ニ循ヒ最近ノ裁判所ニ出頭ス可キ呼出状ヲ四十八時内ニ其被告人ニ送達ス可シ  
被告人ヲ違警罪裁判所ニ移シタル時ハ違警罪裁判所詰ノ警部ハ第百九條ニ記載シタル定期ニ循ヒ最近ノ裁判席ニ出頭ス可キ呼出状ヲ四十八時内ニ其被告人ニ送達ス可シ  
第百十五條 糺問判事ハ被告人ニ重罪ノ証憑アリト認メ控訴院ノ重罪問擬局ニ移シタル時ハ輕罪裁判所檢事ハ豫審ノ昏類及ヒ証昏類并ニ証拠物件ノ目錄ヲ違延ナク控訴院檢事長ニ差出ス可シ但シ其証拠物件ハ其昏記

局ニ留置ス可シ  
此場合ニ於テ既ニ被告人ヲ拘留シタル時ハ控訴院ノ重罪問擬局ノ言渡アルニ至ル迄被告人ヲ其終拘留所ニ留メ置ク可シ  
第百十六條 第百十一條第百十二條第百十三條第百十五條ノ場合ニ於テ糺問判事ノ爲シタル言渡ハ輕罪裁判所檢事ノ請求昏ノ末ニ附記ス可シ  
其言渡昏ニハ被告人ノ姓名年齢身分職業出生ノ地住所犯罪ノ事件及ヒ之ヲ重罪又ハ輕罪若クハ違警罪ト為ス刑法ノ箇條并ニ犯罪ノ証憑ノ有無ヲ記載ス可シ  
輕罪裁判所檢事ハ其言渡昏ヲ受取リタル時

ヨリ廿四時内ニ民事ノ原告人及ヒ被告人ニ  
其言渡昏ヲ送達ス可シ  
第百十七條 輕罪裁判所検事ハ前數条及ヒ第  
五節ニ記載シタル紀問判事ノ言渡ニ故障ヲ  
速フルヲ得  
民事原告人ハ第九十八条第百十条第百十一  
条第百 条ニ記載シタル言渡及ヒ其他民  
事ノ權利ヲ害スル總テノ言渡ニ付故障ヲ速  
フルヲ得  
被告人ハ第九十八条第 條ニ記載シタル言  
渡ニ付故障ヲ速フルヲ得  
故障ヲ速ヘントスル時ハ其言渡昏ヲ受取り  
タル時ヨリ廿四時内ニ故障申述ノ昏面ヲ釋

訴院ノ重罪問擬局ニ差出ス可シ但シ其問  
局ニ於テハ他ノ事件ノ取調ヲ停止シ先ツ其  
故障申述ノ判決ヲ為ス可シ  
勾當セラレタル被告人ハ故障申述ノ判決ア  
ル迄ハ其終勾留所ニ當メ置キ又故障ヲ速ヘ  
タル時ト至ル故障ヲ速フルヲ得可キ期限  
内ハ其被告人ヲ其終勾當所ニ當メ置ク可シ  
如何ナル場合ニ於テモ控訴院検事長ハ糾問  
判事ノ言渡ニ付故障ヲ速ルヲ得但シ故障  
ヲ速ル時ハ糾問判事ノ言渡ノ時ヨリ十日内  
ニ故障申述ノ昏面ヲ差出ス可シ  
検事長ノ故障ヲ速タルニ當テモ被告人ヲ解  
放スルノ言渡アル時ハ假ラニ之ヲ解放ス可

法... 言... 事...

第一百八條 民事原告人故障ヲ述ル取訴

時被告入言對一損害人復之為不可言

渡先受取可出因...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...

言...





